

2011(平成23)

漢詩神奈川

第9号

神奈川県漢詩連盟

横浜市旭区中沢
3-39-9

電話045-361-2033

FAX045-361-2033

発行人 中山 清

編集人 田原 健一

天青、水碧、潮風爽！

「城ヶ島秋の吟行会」快晴に恵まる

三村 公二

十一月二十九日(月)、秋晴れ、ほぼ無風の好天に恵まれ、「城ヶ島を眺め、三崎でマグロを！」のキャッチフレーズの下に、第五回吟行会が開催された。遠路はるばる石川岳堂先生、窪寺貫道先生にもご参加を頂き、総勢三十八名が朝十時に三崎口駅に集合した。まずは、幹事さんより本日の韻字が各人 hands 渡される。今回は、季節/場所などを考慮した「尤」韻と「庚」韻の二つ。韻字を貰った途端に出来たとつづやく人、詩語集など取り出して調べた人、何時もの吟行会の風景である。

三崎駅から目的地の城ヶ島まで約二十分、バスに分乗して到着。昼食までの約2時間は、自然の流れで、岩場の城ヶ島海岸を北原白秋碑前までの約1kmを散策するグループと、舟に乗って海から城ヶ島を一望しようというグループの大きく二つに分かれる事になった。波は穏やかで、遠くに富士山も一望でき、どちらのグループも秋の城ヶ島を満喫できた

で始まり、石川先生のご挨拶、窪寺先生のご発声による 乾杯により開宴となった。

三崎名物の大かぶと焼きも出るマグロづくしの料理を楽しんでいるところで、いよいよ本日の本命行事、柏梁体の秀作が、皆の悲喜こもごもの歓声の中、石川先生より発表された。今回は力作が多かったせいか、目標の十句以上

上の句が選ばれたが、特に目立ったのは女性の句が四句も選ばれたことであろう。

会もたけなわ、何時ものように、石川、窪寺両先



三崎名物) マグロの大兜焼き

ようである。

懇親会は三崎館本店。

桜庭理事の軽妙な司会の下に、所用でご欠席の

中山会長に代わって岡

崎副会長の開会の言葉

で始まり、石川先生のご挨拶、窪寺先生のご発声による

生の即興の詩が披露された。先ずは石川先生が吟行会に寄せる七絶を手元の紙にサラサラと書かれた。

一日吟行試勝遊

遊崎岸上情輕舟

天青水碧潮風爽

特立芙蓉冠八州

すかさずこれを受けて、窪寺先生がこれまた紙に

サラサラと次韻された。

敬歩石川岳堂先生原玉

城島沙濱半日遊

波夷客儼一篷舟

予扶短杖重君徑

俱望芙蓉蟠四州

両先生のこの鮮やかな至芸に、皆感嘆の声をあげ、

さらに二つの詩を住田監事が声高らかに朗詠され

ると、拍手喝采であった。

次いで、これ又恒例となった岡崎副会長の貝殻節初参加者、新人フオローアップ研修会代表の挨拶など会員の方々のスピーチが続く、さらには三上理事、中西さんの詩吟、室橋さんの中国語による朗詠などで会は最高に盛り上がった。最後に磯野理事の閉会のご挨拶によって盛会のうちにお開きとなった。

詩の感性を磨き、会員の志気を高め、互いの友好を深める為に役立つ有意義な吟行会を企画され、いろいろとお世話をいただいた三上理事、関係の役員の方々にあらためて深く感謝申し上げます。

終

◆城ヶ島柏梁体聯句

編 城田 六郎

十一月二十九日小春日和の城ヶ島に38名が集い、柏梁体を競いました。庚韻と尤韻とがうまい具合に19名ずつに分かれました。

其一「尤韻」聯句

城島吟行詩應酬	桜庭 慎吾
崖上咸是探詩儔	玉井 幸久
碧海縹緲思悠悠	生駒 裕子
東海銀濤忘千愁	上田 尤子
安寧芙蓉忘百憂	大原真理子
天晴水綠古津頭	花田 公行
碧天鳶舞望洋樓	水城まゆみ
遠来海邊見黃橙	桑江 彰子
天晴城島磯香幽	坂上 貞夫
汀渚倚筇憶白秋	中野 国武
大瀛滄茫浮釣舟	岡田 泰男
小舟緩繞海鷗洲	古田 光子
海鷗相喚逐潮流	田原 健一
片舟分浪白鷗浮	圓谷 照男
鷗鷺登陸城島邱	窪寺 啓
芙蓉特立冠八州	石川 忠久
碧海白雲富峰抽	中西エツコ
富嶽幽遠風意柔	森本 英之
遙仰芙蓉萬感稠	高津 有二
其二「庚韻」聯句	
城島海碧集賢英	住田 篤雄

三崎砂上探詩情	室橋 幸子
三崎散策路難行	三村 公二
秋晴三浦綠野耕	三上 光敏
白雲碧海界明明	川上 修己
城島磯頭海潮鳴	酒井謙太郎
日繞南涯草樹榮	小松日出夫
棧閣如虹潮駭生	唐戸 輝哉
奇勝洞門通潮聲	中島 龍一



北原白秋碑の前で

通天歸帆眺行程	岡崎 勝郎
天高蜻蛉翔縱橫	宇津井 寛
魚看仰崖還鳥精	磯野 衛孝
是天碧海舞鳶輕	城田 六郎
蒼穹鳶唳秋氣清	飯沼 一之
天晴富嶽亦歡迎	瀧川 智志
冠雪芙蓉碧波平	岡崎 満義

夕陽燃天城人驚	松本 正義
垠崕怒濤一詩成	内村 才五
心身清淨欣歸京	佐藤 昭二

終

連盟総会5月18日(水)に決定!

【神奈川清韻】の合評会も兼ねて実施、

奮って出席しましょう

神奈川県漢詩連盟の総会は、来る5月18日水曜日の1時からと決定しました。今回は特に連盟創立5周年という区切りの年でもあり、ぜひ皆様のご参加をお待ちしています。

場所は従来どおり神奈川近代文学館、懇親会はすぐ横のポートヒルホテルです。

特に、5周年行事として発刊の「神奈川清韻」の合評会を後半の懇親会席上にて実施の予定です。詩集は4月上旬にはお手元にお届けするつもりですので、ご持参の上、ご出席願えればと考えています。

また、恒例の記念講演は、石川忠久先生にお願いしています。演題は「自然を詠う詩」です。

5月の風馨る港が見える丘で、皆様にお会いできるのを楽しみにしています。



◆国民文化祭「おかやま」漢詩大会

会に出席して

古田 光子

第25回国民文化祭「漢詩大会」は、昨年11月2、3日の両日、岡山県浅口市で行われた。

2日はまず吟行会、山陽本線鴨方駅から集合場所の天草公園へ。午後1時に2台のバスに分乗して出発した。A班の私は、まず昭和の優れた漢詩人と云われる阿藤伯海記念公園の見学。旧居の臥龍洞内には遺愛の品々が飾られ、書齋には「虚白室」という軸が掛けられている。実に清らかな住まいだ。庭には絶筆となった五言排律「右相古備公館址作」の詩碑、ひっそりとした山あいの澄んだ秋の空気の中、孤高の漢詩人の姿を偲んだ。

その後、江戸時代の町家を中心とする鴨方町家公園を見学し西山拙斎の墓に詣でたが、お土産にと実生の楓の鉢を用意してくださったり、甘酒を振舞ってくださった鴨方の人々の暖かさが印象的であった。また、バスの中で山田方谷の「子孫と言葉を交わす事が出来たのも、よい思い出である。」

夜は遙照山ホテルでの交流会、石川忠久、伊藤竹外先生の漢詩に感嘆、展示された特別賞作品を鑑賞しながら、大いに盛り上がった。

3日は、いよいよ漢詩大会。日本舞踊のアトラクションのあと式典。文部科学大臣賞「過函谷関」の作者横山英子氏は同じ教室で学ぶ仲間、とても喜ばしい。

城田六郎氏を始め、神奈川県漢詩連盟の人達の名が呼ばれる。神奈川県立北陵高校2年生の作が入選したのも嬉しいことだった。

式典後の記念講演は石川先生の「阿藤伯海の話：師友との交わり」。狩野直喜、鈴木虎雄先生、親友斉藤响氏等に贈られた詩の中で、教え子への「寄村上生在九州」に感動、近寄り難かった大簡先生に親しみを感じた。

午後は吟詠による特別賞作品の発表。獨吟、合吟、舞、書道吟と工夫が凝らされ、華やかで、会場のホールは人で溢れた。

運営された方々のご苦労は大変であったろうが、漢詩を学ぶ者にとって意義深い大会であった。毎年の大会開催を切に願っていた。(終)

◆神奈川県漢詩連盟の方の入賞作

国民文化祭での神奈川県漢詩連盟の会員の入賞はなんと6人、次の方々である。

浅口市長賞 城田六郎氏 浅口市教育委員会教育長賞 古田光子さん 秀作賞 生駒裕子さん 住田笛雄氏 入選 瀧川智志氏 石川省吾氏
うち特別賞のお二人の詩を、ご披露する。

讀宮家後集

城田六郎

瀟落柴荆不出門 瀟落 柴荆 門を出でず
帝郷遙拜倚頽軒 帝郷 遙に拜し 頽軒に倚る

無由雪罪奈幽憤 罪を雪ぐに由無し幽憤を奈せん
想得賜衣留淚痕 想ひ得たり賜衣涙痕を留むるを

代悲素居老嫗

古田 光子

獨守家居待子回 獨り家居を守りて子の回るを待ち
庭花愛育久堪哀 庭花 愛育して 久しく哀に堪ふ
薔薇馥郁無人到 薔薇 馥郁として 人の到る無し
唯看遊蜂求蜜來 唯看る 遊蜂の蜜を求めて來るを

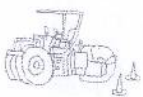
作者から一言

城田六郎さん

菅原道真の「九月十日」の詩はつとに有名ですが、自分のことだけに時平の讒言で大宰府に流された悲しみ恨みは表に出せず「独り断腸」程度に抑えています。「管家後集」を読み、その無実の罪を着せられた憤怒や憂悶は切々と胸に迫るものがあり、何とか道真の気持ちを詩で表現したいと作詩しました。

古田光子さん

近くに住んでおられた一人の老婦人、暑い夏も寒い冬も庭で草花の手入れをしておいででした。そして門前を通りかかると、自分の育てた花を差し出されるのです。でも、殆どの人が怪訝そうに無言で立ち去られます。彼女は悄然と門のうちに戻られるのです。多分一人暮らしたたのでしょう。その寂しそうな後姿が、目に焼きついていてそれでその方のごことを詠ってみることにしました。



◆足利学校と大七と古印もなか

岡崎 満義

栃木県漢詩連盟の方々10数名が、横浜に尋ねてこられ、締めくくりに中華街で美酒佳肴の会を開いたのは、一昨年の秋のことだった。次は神奈川県漢詩連盟がそちらを訪問しよう、と約束して、一年後、昨秋10月末中山会長以下19名で足利市の地を踏んだ。

須永美智夫会長、石川郁三事務局長以下たくさんの方々が出迎えてくださった。足利学校や古刹、鑱阿寺などを案内していただいた。日本最古の学校と言われる足利学校の創設は、諸説あるようだが、実証できるのは室町時代、上杉憲実が書籍(国宝指定)を寄進し、庠主(学長)制度を設けて学校を再興したころから、広く知られるようになったようだ。



足利学校 学校門の前で

大きな楷樹、孔子像、閑静な庭、落ち着いたたたずまいの建物、歴史には不思議な静かさがある。歴

史的な時間が目に見えぬ水の滴りとなってポトリ、ポトリと私の体の中に静かな音を立てて落ちてくるような気がした。歴史的に古い土地には、靈気のようなものがある。

懇親会はこれまた明治時代の由緒ある建築、蓮花館でひらかれた。石川事務局長が栃木の銘酒「大七」を、特別に持参して見えた。思わず頬が緩んだ。40年ほど前、昨夏亡くなられた作家の三浦哲郎さんと一緒に、郷里の八戸へ取材に行く途中、車窓から田園風景を眺めていると、突然、「酒は大七」という大きな野立て看板がいくつも目に飛び込んできた。三浦さんは「大八でなくて、大七か」とニヤリとした。三浦さんの家からほんの一駅のところは泉大八さんの家がある。私は泉さんも担当していたので、時々話題に上った。泉さんの文学的出發は「新日本文学」というプロレタリア文学系だったが、その後大きく変わって、私が担当するころは、ユーモアのあるちよつとエロっぽい風俗小説になっていた。ふだんの泉さんは礼儀正しく静かな禅僧のような人で、禅僧にも色道修行があるのか、思いたくなる小説でもあった。そんなことを思い出しながら飲んだ「大七」は思った通りおいしく、五臓六腑にしみ渡った。少し前、テレビのニュースで足利市商工会議所から「論語カルタ」が刊行されたと知っていたので、早速、取り寄せていただいた。4年前、須永会長が商工会議所の職員に論語の講義を始めたことがきっかけになって「論語カルタ」に発展したようだ。素晴らしい。

楽しい懇親会が終わり、再会を約束してタクシーで駅にむかった。途中に足利名物のお菓子屋がある

と聞いて下車。「古印もなか」を買った。これが絶品。家に帰ってすぐ一つつまんだ。粒あんが弾けるほど詰っている。ふつうの最中は、外の皮と中のあんこの間にかんりの隙間があるものだが、「古印もなか」にはこの隙間がなくぎつしりのあんこ、大満足だった。今年秋の全日本漢詩大会は足利で開かれる。また、「古印もなか」を買って帰るつもりだ。

神奈川県漢詩連盟詩友訪足利学校

最古序座千歳同

仰看聖像與蒼穹

鷗盟相集語文雅

浴得飄飄楷樹風

終

◆足利学校吟行・柏梁体聯句

編 中山 清

栃木・神奈川両県の交流吟行会の柏梁体の取りまとめを依頼されました。

皆さんの引かれた韻字は、上平声の十一真から下平声の一先までの韻目、真、文、元、寒、刪、先の韻字で、通韻ですので韻目の区別なく、詠まれた十三句の内容により四区分にして並べてみました。多少のちぐはぐもありますが、却って当日の雰囲気や伝えて、思い出となり、絶句の端緒ともなればと願っています。

其一 再會

秋深紅葉雜翠巒

須永 禮子

晚秋足利名所編

大島 毅一

賓客遠来恨積雲
雲低雨加秋景寒
鷗盟再會泮池邊

須永美智夫
宇津井寛
石川郁二

其一 足利学校

楷樹亭亭聖廟前

桜庭 慎吾

杏壇門下絶雨煙

酒井謙太郎

學校清浄正無塵

室橋 幸子

孔子坐像尚整然

高島 幸平

松陰颯颯中世聞

宮田 秀義

俊秀負笈出鄉關

瀧川 智志

遊學庠校何安閑

中山 清

學校鎖門幾百年

石井 彦徳

温容夫子松樹間

古田 光子

古庠翠松心地團

飯沼 一之

巖仰校門先哲恩

鈴木 進

學門傳統今古薫

住田 笛雄

詩人學習傳斯文

江本 英一

其二 鏝阿寺

砦耶寺耶濠與門

城田 六郎

鏝阿偈字慈風圓

綾部 宏行

清畫鏝阿投賽錢

高津 有一

亭亭鴨脚柱秋天

岡崎 滿義

銀杏黄葉秋已蘭

鈴木 教良

古寺秋庭洗心魂

奈良原名王子

獨護青史古刹蓮

三村 公二

世相圖卷奇又珍

中野 国武

古寺鐘聲煙樹昏

水城まゆみ

春夏秋冬萬象眠

内村 才五

中秋碧落壺中禪

中臣 正之

其四 蓮花館芳苑

海人携肴訪山人

田原 健一

使拂屏障宴群仙

別所 正啓

重杯談笑菊花茵

武藤千恵子

下毛相模詩友全

三上 光敏

終

●全日本漢詩大会の詩の課題は

『山』に決定!

今年秋、足利市で行われる全日本漢詩大会は、栃木県漢詩連盟と全日本漢詩連盟の共催で行われます。去年岡山で行われた国民文化祭にとつて変わるもので、毎年全日本漢詩連盟で実施している『扶桑風韻』の詩の募集も、この大会での応募に置き換えられます。

交流会でお世話になった栃木県漢詩連盟が地元で開く全国大会です。一首でも多くこの大会の募集に応じることをご希望したいと思います。

応募要領は確定次第にご連絡します。只、課題が『山』と決定しましたので、今の段階からご準備願えればと思います、お知らせしておきます。

●『神奈川清韻』の発刊、間近です

去年の暮れで募集を締め切った5周年記念の詩集『神奈川清韻』への皆さんの応募詩は、85首に及びました。予想を超えての沢山の応募、まことに有難うございました。

この発刊のために編集委員会を結成し、只今大童で準備中です。

編集委員会は、次の方々をお願いしています。

委員長 岡崎満義 総括 桜庭慎吾

委員 水城まゆみ 三上光敏 三村公二 高津有一

中島龍一 川上修己 吉岡昭夫

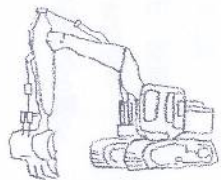
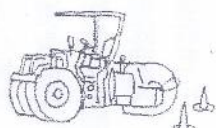
会員への応募の呼びかけから始まり、平仄のチェック、旧字への書き換え、内容の点検、パソコンへの印字等等、結構な作業になるため手分けして準備して頂いています。

なにせ、国立図書館に収めたいと考えている詩集であり、また世間にご披露するにしても神奈川の漢詩のレベルが問われかねない問題と想っています。ために、一部推敲をお願いする場合もあるかも知れません。何卒ご承願います。

今年3月末に完成、お手元に郵送の予定です。

また、合同の批評会を連盟総会の後半、懇親会の場で実施したいと考えています。どんな風に顕彰するかを含めて検討中です。

総会には詩集を1持参のうえ、ぜひご参加くださるようお願いいたします。



秋の研修会盛況!

その作品の中から

秋の研修会は、40名のご参加を得て従来と同じA B 2つのグループに分けて実施しました。皆さん句方式にも慣れて、ご自分の詩の披瀝やお互いの見の出し合いについても遠慮なく発表されるようになり、本来の目的である研修の実が揚つてきているように思えます。

まだ出席したことが無い方も沢山おいでです。どなものか見てやろうの野次馬精神で一度覗いてみませんか。手持ちの詩句で構いません。春の研修会6月2回です。ぜひご参加下さい。

寒房夜坐

大谷 明史

秋宵欲記一論評 秋宵記さむと欲す 一論評

銀燭照房書案明 銀燭 房を照らして 書案明たり

停筆千思猶萬慮 筆を停めて 千思 猶萬慮

微聞犬吠夜三更 微かに犬の吠ゆるを聞く 夜三更

倣定家詠歌 水城 まゆみ

秋浦茫茫斜日寒 秋浦茫茫として斜日寒く

蘆花楓葉盡凋殘 蘆花 楓葉 尽く凋殘す

不關權貴征戎事 權貴 征戎の事に関せず

文質彬彬鐵石肝 文質 彬彬 鐵石の肝

グループ高得点作品

贈横綱白鵬 岡崎 満義

白鵬磐石似無争 白鵬は磐石 争い無きが似し

双葉威風爽又清 双葉の 威風 爽にして又清なり

尚願鍊成心與技 尚お 心と技を 鍊成せんと願う
木鶏佳境杳前程 木鶏の 佳境 前程杳かなり

題嘉峪關夕景図

岡田 泰男

斜陽投影隊商間 斜陽 影を投ず 隊商の間

駝背綾羅馱若山 駝背の 綾羅 馱せて山の若し

瀚海唯沙與羌笛 瀚海 唯 沙と羌笛と

泰西天外道難艱 泰西 天外 道難艱

輕井沢夏日偶成

佐々木 正人

遙望淺間巡碧池 遙かに淺間を望み碧池を巡る

稚鳥成列畫文漪 稚鳥 列を成し 文漪を画く

綠陰獨佇浴涼氣 綠陰に独り佇み 涼氣に浴す

將是逃街至樂時 將に是 街を逃れ 至樂の時

秋の研修会に参加して

佐々木 正人

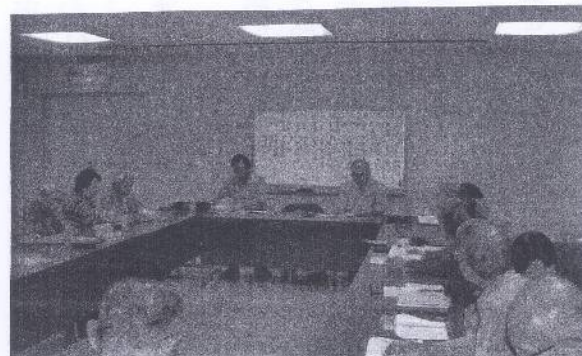
昨年秋の研修会終了後、連盟の先生方と打ち上げのビールを飲みながら漢詩についての四方山話をしてるときでした。事務局長から突然次の会報に研修会に参加しての感想を書けとのご下命がありました。田原さんからの話であれば、こと漢詩に関してはお断りできない私です。それは……

それは3年前第1回初心者入門講座に出席し、卒業作品を提出し、補習授業を受け、更にフオーアップの授業にも出て、私の漢詩処女作を何度も何度も添削して送り返して下さったのが、局長だったからです。年齢、古希を過ぎた漢詩作りの1年生は、度重なる懇切丁寧な指導のやり取りを頂き、その

熱心さに心動かされてこれは辞めてはいけなないと肝に銘じたと思います。今回はからずも大先生や諸先輩をさしおいてかなりの推薦点を頂きました。これを一番喜んでくれたのも局長でした。嬉しい限りです。

さて、研修会についてです。中山会長は漢詩作りに必要なことは継続であると断しておられます。「継続は力なり」と。漢詩実作のうえで、連盟のいろいろな行事のなかで私には、研修会に継続して参加することが一番役に立つように思っています。私は平成21年から22年の2年間は休まず年2回参加させて頂きました。会長をはじめ偉い先生の中に混じって一首ごとに評価し詩論を展開しあうこの会場のやり取りは、自分の詩について他人がどう見ているかは勿論最大の関心事ですが、ほかの方の詩についての話を聞いているだけでも大変勉強になることを実感しています。

今年も金星会ご指導の岡崎副会長を始めとして連盟の先生方のご指導を頂きながら、研修会出席を手かせ足かせにして漢詩作りが休眠にならないよう頑張りたいと念じています。どうぞ宜しくお願い致します。



◆第4期生吟社『詩游会』発足!

世話人 川上 修己

平成22年の神奈川県漢詩連盟主催の第4期初心者講習会が昨年4月から6月にかけて6回行われました。最初は40名ほどの参加者と聞いておりますが、講習会終了時には20数名となりました。10月のフォローアップ研修会には11名の方々の参加があり作詩の合評とフォローがなされ、都合により参加出来なかった方は10名程でした。この時、連盟より吟社の結成を強く要請され、12月15日にフォローアップ研修会に続き第1回目の勉強会と称して横浜開港記念館において会合をもち作詞の合評等を行いました。会に先立ち、会の名称と運営方法を話し合われ、4期生にちなみ詩(四)と漢詩を楽しみ遊(遊)ぶという意味を込めて『詩游会』という名称となりました。「遊」には清遊、游子、遊樂など趣のある熟語が多数あります。名前に負けない、遊び心のある吟社としてみんなで頑張つて漢詩づくりに励む覚悟です。

講師として連盟役員の桜庭直吾氏と住田笛雄氏の両先生にお願いすることになり、今後2ヶ月に一度の研修会を行うことを申し合わせました。会員は初心者研修会の終了時人数として男性17名女性5名、全員で22名となっております。ご夫婦の会員もいらつしやいます。漢詩を始めた動機はいろいろですが、詩吟を行っている方は自詩を詠じてみ

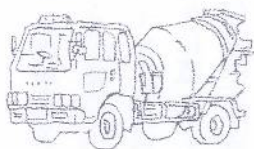
たい、書道で自詩を書いてみたい、漢詩の鑑賞のみならず作詩してみたい、人生を漢詩として残したいなど様々な詩への思いをもつ方々の集まりとなっております。

会員の詩風も様々ですが、高齢者も多く長年の人生を映し出しています。フォローアップ研修会と第1回目の詩游会の詩を概観しますと、Aさんは中国大陸を旅行されたのでしよう、大陸の広大な風景を詠じ、Bさんは世界遺産巡りによる遺産風景を、Cさんは「能」の鑑賞の感激を、Dさんは鳥取大山からの情景を雄大に詠じています。旅の風景、季節の移ろい、社会情勢などご多分にもれず個性溢れた詩が詠しられています。

この会の根づきの目的は、難解な漢詩の壁に押しつぶされないよう会員同志互いに手を取り合つて励ましあつて作詩を続けることであろうと思つていきます。

4期生の吟社として先輩吟社に後れないよう切磋琢磨、努力していく所存です。連盟の諸行事にも積極的に参加してその結果として連盟の発展充実の一助になればとも願っています。ぜひ皆様の暖かいご支援をお願いいたします。

今後の「詩游会」の活躍をご期待ください。(終)



◎お願い

初心者講座へ新人さんを送り込んで下さい

漢詩作りの勉強 また始めませんか

また今年もこの四月から恒例の『初心者入門講座』が開講されます。5回目を数えて、受け入れ体勢の方は慣れもあつて随分と充実もしてきましたが、何よりも事務局の心配は受講者が集まってくれなかろうか、です。去年も申し込みは40数名を数え、おおいに張り切つたのですが、案内をしていく途中で、漢詩の鑑賞でなく難しそうな実作だと判ると尻込みされる方が多く、半分に減りました。

新人さんの新鮮な力が神奈川県漢詩連盟の活力源だと思つていきます。

今年もお友達やお知り合いの方にこの講座をお勧め願います。興味を示された方がおいででしたら、事務局田原まで電話なりFaxなりお気軽にご一報願います。勧誘も当方でやります。

電話 Fax 045-361-2033

また、ギブアップした作詩をもう一度やり直してみようとなさる旧人さんも例年おおいです。勇気を出しての再チャレンジ、大歓迎です。

中山会長も判り易さを頭において講義なさつていますし、我々役員グループ指導も優しく厳しくをモットーにその効果を挙げつつあると自負しています。ぜひとも神奈川県漢詩連の生命線である新人育成に貴方さまのご支援をお願いいたします。

●漢詩の一粒種は蒔かれたか

岡崎 満義

昨秋、岡山県浅口市で開かれた漢詩大会(国民文化祭おかやま2010)の入賞作品が、立派な小冊子になった。文部大臣賞をはじめとする特別賞が16篇、秀作25篇、入選43篇、若年者入選6篇が載っていた。パラパラめくっているうちに、ふと、一般入選作品のトップに載っている一首が目にとまった。

秋

返照染雲紅玉流 寒鴉西去入雙眸

獨聞古寺晚鐘響 吹領涼風遠近秋

秋の風物が行儀よく、サラリと詠われているな、と思いつながら、作者の名を見ると「神奈川県鎌倉市(神奈川県立茅ヶ崎北陵高等学校二年)成瀬萌実」とある。私が住んでいる地元の学校ではないか。二松学舎大学主催の大学生、高校生漢詩コンクールは昨年で5回目になったが、思ったほどのノビは無い。入選を沢山出す学校はやはり指導者の力が大きい。栃木の上三川高の沢村茂樹先生、東京、純心女子高の河野光世先生などがそうだ。茅ヶ崎北陵高にもその人ありか、と期待した。早速《金の卵》の取材を申し込んだ。

女性の若い教頭先生が、成瀬萌実さんと引き合わせてくれた。サラリと背の高い可愛い女子高生(3年)だ。聞けばバスケットボールの選手で「センターフオワードで、昨年は高校総体にも出場しました。1回戦で負けましたけど」と、くったくなく笑った。

「漢詩は2年生のとき、臨時講師の女の先生が2ヶ月くらい、プリントで熱心に教えて下さいました。始めに、日本語で四行詩を書かせて、それに当てはまる漢語をプリントの中から探し、先生に直してもらって一首作りました。20人位の詩を国民文化祭に送り、たまたま、私のだけが入選しました。そのあと? まったく作っていません」

成瀬さんは将来、養護教員になりたいと、地元の女子大学に進学が決まっている。漢詩をはずけようという気持ちは、今のところ無いようだ。彼女を指導した講師の女先生は、四字熟語や故事成語を生徒に与え、「二人劇に仕立てて演じさせたりしている。彼女も「先ず陳より始めよ」を劇にした」と話してくれた。

創意工夫のある先生にインタビューしたいと思い、教頭先生に頼んでみたが、はかばかしい返事がなかった。どうやら学校の教育指導秩序を乱す「暴徒」であつたらしく、1年間で北陵高を去っていた。やる気満々は時に秩序紊乱者になることは世の常でもある。女先生へのインタビューは諦めて、成瀬萌実さんという漢詩の「一粒種が地に蒔かれたのだから、何十年かあとに漢詩の芽が出てくるかもしれない、とかすかな望みをもつて、北陵高をあとにした。

◆黒白を忘れて時に五七五(二)

磯野 衛孝

昨年この欄でお目もじさせて頂きましたが、その後皆様夫々に作詩にご精進のことと思います。さて、小生はと言えば……

推敲に 水耕重ね 一寸芽が

冷やセンス(?)にも 花開くかも

詩語選び 平仄ばかりが 先に立ち

並び終われば 詩心 何処?

ならばとて 我意貫く その結果

説明だらけの 黒白合せ

無理やりの造語はもしや詩語(死語)ならむ

諸橋先生 振り向きもせず

詩は新味 想い寒くさり 古き詩の

用例継ぎはぎ デジャビュ(既視感)の景

悩む身に 救う神あり 老先生

詩にも算数 頭の体操

1 + 1 10 ÷ 5でも 答えは2

同じ風景 別な目で見る

旅の詩に 地名入れるは 人の情

字の格添わねば 致命(地名)傷かも

地名をば 題に収めて 知らぬ顔

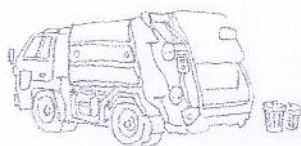
どこでも通用 それ 無責任

悩み多し 見果てぬ夢を 追い求め

今日も今日とて 詩国 漫遊

今回は、このあたりで。

終



◆井上通女のこと

岡崎 勝郎

寛永から元禄享保(1624~1738)の江戸中期は、羅山、益軒、徂徠、白石と幾多の文辞学者を、漢詩では服部南郭、祇園南海等の逸材を輩出した時代である。

そんな時世のある日、十六歳の少女が父に伴われて讃州丸亀を発ち江戸へ向かった。丸亀藩主京極氏の母が少女の文才を聴き知り、ぜひ江戸へと召し寄せたのである。

「東海紀行」は少女(通女)の丸亀から浜松までの現存する紀行文である。

大阪までの瀬戸の船行きの文章では、上からの慈悲深いお召しに「衣にも堪えざる心地す」と、『昔周公の文王に仕え其行専制なく身は衣に勝へざるが如し』に擬え、故郷との別れには「杜工部が謂水のことば思いださる」と、杜甫の李白を懐かしむ詩、『謂水春天樹 江東日暮雲』に倣う。

難波で関所手形の交付を受け、淀川を三十石船で伏見へ、ここからは高瀬舟に乗り換えて京都と上り、鈴鹿、熱田と下り、荒井関(浜名郡新居町)に着いたのが国を出て十一日目であった。

浜名湖の西岸この関所で不意の苦境に見舞われる。原文「難波にて賜りし御印、関所に奉りしに、わきのあけたる少女と書きわくべき事を、えしらで女のみ書き奉り、さて御印のことばにも女とのみ有りければ、許し給わで空しく宿に帰りぬ。」袖の脇明

けたる少女と記すべきを、女とだけ記したのがいけなかった。

自経萬里走君命

自ら萬里を経て 君命に走る

今日已来荒井関

今日已に来たる 荒井の関

未識少長因袖分

未だ識らず少と長の袖の分るに因るを

空留旅館我心懸

空しく旅館に留り 我が心 懸む

関所の文面を正すべく急ぎ使いの者を難波に発たせ、使いが戻ったのが六日目。こうしてやつと東岸舞阪へ辿りついたのだった。

筆者の調べでは荒井関は女人関所といって、同伴者を含めて女人専用であった。それとは別に湖西に沿った脇街道があり、それを往くと男子専用の今切(現三ヶ日町)の関所があった。箱根、今切、福島(白河?)の三関が幕府直属の最も厳しい関所であったという。

「東海紀行」は浜松に入ったところで結びである。通女、風邪をこらして父から書くことを固く禁じられたのである。江戸丸亀藩邸での修学は九年に亘る。縁故により故郷丸亀嫁ぐこととなったのは元禄二年、二十五歳の時である。

その前年、林羅山の上野忍ヶ岡の私塾と聖堂(孔子を祀る文廟)が、五代將軍綱吉の賞賜を受けて湯島に移されている。その学問所は羅山亡きあと寛政九年(1799)幕府に管収されて昌平黌となる。祭主(塾頭)は代々林家が大学頭となつて継いだ。さて通女帰郷のさい「帰家日記」と題した二十五歳時の紀行文も現存している。

これには九年間故郷の両親を恋しく思ったことを「げに周公の聖にてだに東山の三年を嘆き給ふ。ま

しておろかなる心の闇に九とせの久しきながめも……と、周公旦の『我徂東山 愔愔不歸 我來自東 零雨其濛』に擬えている。さらに許由の故事、潁川で川水で耳を洗い箕山で瓢を投げ捨てたことを、旅の先々で巧みに文章に取り入れている。それとても女らしく控えめにである。

天竜川を渡るときの原文「天龍川ふたつ有りてまづ舟にて渡る。水浅く舟行きなやみければ皆おりたちて、船ばたを捉えおし出す。やおら深きに浮かみ出でて心よく渡りぬ。後の河は徒わたりたり。鳳凰台に題せし詩を思い出して、おこがましけれど……川の真中辺に洲があるために、天竜川ふたつ有りてとなる。

天龍河上天龍去 天龍河上 天龍去り

龍去河留二水流 龍去り 河留まりて二水流る

二水中分成大小 二水 中分れて 大小と成り

小斯厲揭大斯舟 小はこれ厲(砥石)を掲げ大はこれ舟

これは李白が金陵台(南京)の鳳凰台に登った時の詩、『鳳凰台上鳳凰遊 鳳去台空江自流』で始まる律詩、その起聯を模した七絶である。

我々、漢詩の固苦しさにたしろいてはいられない立場なのだが、幸い通女は和歌を嗜んでいたらしい。

最後に彼女の柔らかな和歌をひとつ紹介する。逢坂山で作った詩。

「関の戸も鎖さで行きかう逢坂は ゆうつけ鳥のそらねだになし」

関所の門も閉ざされず人の行き交うこの山は、今では夕告げ鳥の空鳴きさえも聞こえてこない。その昔関所での苦勞を思い出したのであろう。

(終)

今年度前半のスケジュール

カレンダーに予定を記入しましょう。

● 年次総会 第6回年次総会は、例年通り記念講演と懇親会をかねて実施します。

▽時期 平成23年5月18日(水) 午後1時～3時半

▽場所 神奈川近代文学館 2階ホール

▽記念講演 石川忠久先生 演題『自然を詠う詩』

▽懇親会 ホテルポートヒル 3階ホール 午後4時～6時 会費5千円

別途、当方より3月下旬に葉書にて出欠を頂く予定です。葉書回答期限4月30日

● 春の研修会 従来と同じ「選句会方式」で、2グループに分けて実施します。

都合のいい日を選んで下さい。

▽時期 Aグループ 平成23年6月15日(水) 午後1時～5時

Bグループ 平成23年6月28日(火) 午後1時～5時

▽場所 神奈川近代文学館 2階会議室

▽申込 別途当方よりの葉書にて申し込む。葉書回答期限平成23年4月30日(土)

▽詩稿提出期限 平成23年5月31日(火)事務局あて。期日厳守のこと。

● 初心者入門講座 第5回目の講座を例年通り実施します。

漢詩の実作が始めての方、或はもう一度勉強し直してみようとお考えの方、お友達と誘い合わせて参加されるのも一策、奮ってご参加下さい。

▽時期 4月14日(木)、4月28日(木)、5月12日(木)、5月26日(木)、

6月9日(木)6月23日(木)、計6回の授業 毎回午後1時～4時

▽場所 神奈川近代文学館 2階会議室

▽講師 中山清会長 他連盟役員

▽申込 葉書或はFAXにて事務局田原宛申し込む。申込期限 平成23年3月末日(水)

● 吟行会 今年初秋9月頃、江ノ島界限を予定しています。確定次第お知らせします。

◆ 編集後記

▽詩の上達のための言葉としてよく言われるのが、『三多』である。沢山の漢詩を読む、沢山漢詩を作る、何度も推敲を重ねる、である。欧陽脩という北宋中期の学問文化の中心人物だった人の言である。政治家として王安石と対立したことでも有名。

彼は『三多』以外にも『三上』と言う事も述べている。曰く、鞍上、枕上、厠上、である。詩の想いをどう形にしてゆくか、良い考えが生まれ易い場所を並べている。今風に言い換えれば、することのない車の中、うつらうつらのレム睡眠の時、邪魔の入らないトイレの最中、ということになるのか。なるほどと頷かされる。

わが身に置き換えて、更に、『三中』を追加して見た。曰く、散策中、喫茶中、入浴中、である。なんてことはない、四六時中考えろと言いつことになる。

▽このところ電子書籍に話題騒然であるが、電子辞書も世に出て久しい。私も使用、便利にしている。嵩張る容積、手に余る重量、目を疲れさせる細字、

『大漢和辞典』のことである。老いの身に厳しいこの辞書をもっと使いやすいように最近の電子技術で工夫して欲しい。スクリーンなんてものがあつて、簡単に電子転換が可能なら、できれば、「愁」で検索するとその字の詩語がずらりと出てきて、しかもその用例が一目瞭然に並ぶ、そんなソフトがあれば、即、買う。版權を握る出版社なのか、電子メーカーなのか、需要量なのか、なんとなく電子書籍ブームの中で、表現が近い予感がするこの頃である。

(田原)

